

# LIGHT OF LOVE

Overseas Project for the Blind - Plans and Reports

No. 8 1993. 7

愛の光通信

東京ヘレン・ケラー協会 海外盲人援護事業事務局



The Morning of Camp Naudanda

本来なら聖山マチャプチャレ(魚の尾)が  
天を突き抜けて  
ドーンと聳えるはずなのですが  
まことに残念！

右うえに雲のように見えるのは  
アンナプルナⅢ(7,555m)であります

## NAWB 年次総会と点字出版所

### NAWB点字出版所落成式

1992年10月15日、カトマンズのネパール盲人福祉協会(NAWB)本部に隣接して建設した点字出版所の落成式を行いました。既に1月に移転していたため、点字出版所のスタッフが白けるのではないかと懸念していましたが、みんな上機嫌でした。

ところで、この出版所の隣には今でも建設途中のNAWB本館がコンクリート剥き出しのまま、一年以上も放置されています。我々が出版所の工事を本格的に進めると、慌ただしくドイツの基督教盲人伝導会(CBM)の援助で、NAWBの本館建設も着手されましたが、出版所の工事が終ると共に本館の工事も中断しました。なんでも、NAWBが川に汚水を流しているとの嫌疑が、政府の「環境保護委員会」から出て、それを晴らすまで工事は続けられないとのこと。汚水を流しているのは隣の交通警察と「区役所」ですが、下水管はNAWBの真下を通っており、これが誤解の元になっています。

### ゴバル寺のNAWB

これまで我々は「NAWBは廃寺に寄寓している」と繰り返し述べて来ました。しかし、これは少し正確さに欠けるようです。NAWBの所在地は、今でも立派なヒンズー寺院です。我々が勝手に崩れかかっている伽藍に住み着いている浮浪者と思っていたのは、実はお坊さん一家でした。慌てて「お寺を潰して盲人協会を建てていいの」とNAWBの職員に聞くと、「政府が決めたことだから、まったく問題無い」との返事でした。NAWBでは将来お坊さんの住んでいる伽藍も取り壊し、盲人施設を建てる方針です。その時には、お坊さんもアパート住まいになるそうです。「その方が、お坊さんも快適な生活ができてハッピー」というのですが、信仰心の篤いヒンズー教徒から、このような言葉を聞くと面くらってしまいます。



At the fully constructed NAWB Braille Printing House



At the annual NAWB general assembly: the Director of THKA presenting the certificate of appreciation to the Convener of Bara CBR Local Co-operation Committee

### NAWB年次総会

同年10月16日、カトマンズの農業会館にてNAWBの定期年次総会が開かれました。来賓として挨拶に立った保健大臣は席上、「政府財政は厳しいので障害者団体は政府をあてにせず、自助努力で事業を進めるように」と挨拶。これに対して、前NAWB会長で現上院議員のプラサド博士は、「これまで障害者団体は、本来政府が当然行うべき事業までコツコツと行ってきた。努力が足りないのはむしろ政府の方である」と激しく批判し万雷の拍手を浴びました。普段は穏やかな紳士が、突然豹変するさまに驚きましたが、予算にまつわる確執と激しい議論はいつも同じようです。

なお、当協会の井口理事も挨拶に立つと同時にバラCBR地方協力委員会のシャハ委員長に感謝状を贈呈し、CBRセンターの土地寄贈など氏のこれまでの協力に対して、感謝の意を表しました。

### 協定延長

同年10月20日、カトマンズの国家社会事業調整協議会(SSNCC)本部にて、ネパールにおける障害者援護に関する協定の最終交渉を行いました。この席は調印を目的に開かれたものでしたが、事前協議により合意した内容と最終的な協定書に食い違いがあり紛糾しました。結局、我々はSSNCCとの『総合協定』には調印しましたが、SSNCC、NAWBおよび当協会三者による『事業協定』にはその場で調印しませんでした。翌日、一部を手直しして調印に至りましたが、NAWBは我々の極めて厳格な態度に終始驚いたようでした。

## 記憶の中の懐かしい国

松本 信二

こうして東京のど真ん中で働いている自分と、ネパールへ行っていた時の自分には大きな隔たりがあるように感じられる。夢だったのかも知れない。狐につままれるとはこのようなことを云うのだろう。僕は、不思議な国に行ってきた。

### 首都カトマンズにて

川岸で藁をかけて死体を焼いているのを見た。こちらの目をじっと見つめて、ブツブツ施しをせがむインドの修行者(?)がいた。しかし、僕は黙ってその前を通った。街全体が夕暮れになると必ず停電になった。車で人を轢いても問題ないが、牛だったら逮捕されるという悪い冗談を聞いた。ビーフは決して口にしない人々が水牛の肉は食べることも知った。牛は神様だが、水牛は昔悪いことをしたのだそうだ。

### 国境の町ビルガンジにて

町一番の高級ホテル(?)に泊まった。しかし、ここでも毎晩水が止まった。道路では神様である牛が棒で叩かれ、重荷を運んでいた。「農民はビタミンA剤は欲しがすが、自分で作っている野菜は食べない」とフィールド・ワーカーがため息をついた。その夜、朝潰したという山羊を、串焼きにして食べさせる露店に行った。冷たいビールに良く合って、素晴らしい味である。串は地面から直接拾って、肉に差していたが、これは見なかったことにした。



Technical Guidance: maintenance of a braille embossing machine



Technical Guidance of a Braille Embossing Machine

### 遠い記憶

古いものが頑固に残り、新しいものと奇妙なコントラストを見せる。人々はこのんびりと頼りなげであるが、しっかり大地に根を張って生きている。様々な矛盾があるのに、気づかない風を装っているのは、日本人と同じだ。妙なことばかりに気をとられ、親しみを感じる。灼熱の太陽に冒されたのか、勘だけがやけに冴える。粗末な露店で煙草を売っていた娘の、何か遠くを見るような眼差しに、僕はすっかり忘れていた遠い昔を思い出した。少年であったころ、僕が日本の何処かで逢った少女の顔がネパールの国境の街にあった。

(点字出版局)

## 海外援護事業記録

(1992 / 6 - 1993 / 5)

- 92年6月 \* 国際ボランティア貯金配分金決定 (6/19)
- \* サンシャインシティ・コンベンションセンターにおける、プロオーディオ総合機器展'92においてチャリティ・バザーを開催 (6/24 - 26)
- 7月 \* 当事務局、外務大臣表彰を受ける (7/13)
- 9月 \* 「愛の光通信 No. 7」発行 (9/3)
- 10月 \* 技術指導・事業管理四名派遣:  
井口、佐藤、佐々木、福山 (10/13 - 26)
- \* SSNCC、NAWBと三年間の協定締結 (10/20)
- \* 研修生シュレス・シュレスタ来日 (10/26)
- 12月 \* IYDP「国連・障害者の十年」最終年国民会議にて井口理事事例報告 (12/7)
- \* RANAP国際会議 (12/9)
- \* ネパール宛車輪発送 (12/17)
- \* ネパール・スタディーツアー (12/25 - 1/4)
- 93年1月 \* 技術指導・事業管理二名派遣: 佐々木、北条 (12/25 - 1/4)
- 3月 \* 研修生シュレス・シュレスタ離日 (3/7)
- \* 技術指導・事業管理二名派遣: 井口、福山 (3/7 - 16)
- \* カトマンズ連絡事務所開設 (3/14)
- 5月 \* 技術指導・事業管理二名派遣: 佐々木、松本 (5/25-6/4)

# 寄宿制統合教育校オープン!

*Develop an Integrated Boarding School*



1993年1月16日、ナラヤニ県バラ郡ドゥマルワナ村に視覚障害児のための寄宿制統合教育校が開校されました。盲児8名のささやかな試みですが、これまで主に経済的な理由により、就学の機会を奪われていたこの地の盲児にとっては画期的なことで、教育関係者を中心に期待が膨らんでいます。

統合教育というのは、障害児と健常児が机を並べて一緒に学ぶシステムで、障害者の公民権を保証する立場から欧米では主流となっている教育方法です。しかしネパールの場合は、財政難により盲学校の建設が難しく、仕方なくこの方法が採られている側面もあります。一般の公立校でも黒板を使った授業があまりされず、教師が口頭で説明し、生徒はそれを聞き覚えるという素朴な授業形態がとられているため、結果的に盲児も教育を受けることができるのです。

このように、ネパールで現在行われている統合教育には様々な面で改良の余地があります。しかし、ネパールの就学適齢期の盲児は、二万人と推定されているのに、実際に教育の機会を与えられているのは二百三十人程度に過ぎません。

我々の目下の課題は、やはり



Learning braille in the resource room

就学率をいかに引き上げるかにかかっています。この課題を達成するためのひとつの手段として、この寄宿制統合教育を推進しています。

## 地域が支える学校

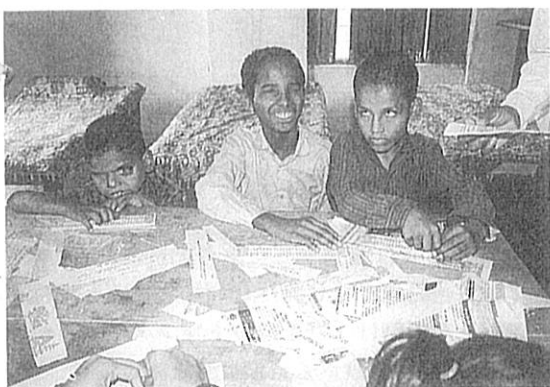
今年我々が開発した統合教育校は、ドゥマルワナ高校という生徒数1,040人のマンモス校です。第1～7学年まで教員の俸給は政府が支給しているので、一応国営の学校ということになっていますが、第8～10学年までの教員の俸給は地元住民

が出し合い学校を支えています。校舎は粗末なレンガ作りの平屋で、校庭をコの字型に囲んでいます。この一角にさらに質素な寄宿舎が建設され、そこに教員と遠隔地から通っていた普通児が寝泊まりしていました。当初そこに盲児も入っているものと思いましたが、寄宿舎とは名ばかりで非常に狭いため、従来からある教室に簡易ベッドを持ち込み、そこに泊まっていました。リソース・ルームとしても使うためある程度のスペースが必要だったので、盲児のほうがちょっぴり優遇されているようでした。



狭すぎるとはいえ、寄宿舍は地元住民が建設費を出し合い、勤労奉仕で建設したものです。この地にいると「ネパールは援助慣れしているため、自助努力が足りない」という批判が、どこか遠くの国のことのように思えます。この学校とそれを支える地域社会の拘わり方を見ると、援助する側の協力する姿勢が厳しく問われているようにも思えます。

この学校では、教室が充分ではないため、青空教室が当たり前で、今だに石板で文字を覚えていました。机も椅子も、教科書も教材もすべてが不足しており、窓が小さいため教室の中は昼間でも暗く、黒板の文字が見えません。しかし、それを我々が指摘し、援助することは持てる国の住民の思い上がりなのかも知れません。



## □□ 数字の魔術と誤植

最近ネパールで発刊された新聞に「カトマンズ・ポスト」という日刊紙があります。官製報道しかない国営の「ライジング・ネパール」に対し、娯楽記事も多く、あか抜けており首都圏の市民に圧倒的な支持を得ている民間紙です。

本年6月3日付のこの新聞に、ネパールの識字率は26.0(%)と載っていました。政府発表の39(%)と、随分掛け離れた数字です。政府は、小学校に入学したものは文字が読めるとみなして計算するので、このような差ができるのです。しかし、1年生が2年に上がるまでに、その半数は中退するといえますから、政府発表はいささか眉唾です。これに対して、あるカトマンズ市民は、「国営新聞と『ポスト』に書かれている内容は、外国通信社からの記事以外はまったく違う」と看破してい

ました。

ところで、このように評判の高い『ポスト』の3月15日号に大相撲が紹介されていました。曙と貴ノ花の取り組みの写真がでかでかと出ており、そこには曙、小錦戦と書いてありました。多分外国通信社の配信ミスなのでしょうが、相撲がネパールの新聞に出ること自体、大きな時の流れを感じさせます。



地元住民が支えるドゥマルワナ高校

Nepal Rastriya Secondary School, Dumarwana (Dumarwana Secondary School), the integrated boarding school, for which we developed the program for the blind this year, has 1,040 students. While the government pays the wage for the first to the seventh grade teachers, the local community supports the wage for the eighth to the tenth grade teachers. A one-story building surrounds the school field, and in one corner, a humble dormitory was built for the teachers and the students from distant homes. At first we thought that blind students also stayed in this dormitory. However, they stay in the normal classroom bringing prefabricated beds, since the dormitory is too small and the blind students need more space for their resource room. So they seem to have a better condition than normal students. Although the dormitory is very small, it was built by the local people's fund and their voluntary labor. Having visited Bara District, we come to know that the criticism, "Nepalese do not make their own effort, since they are aided too much," is irrelevant. It is rather the attitude of the assisting side which should be re-examined.

この日の患者数、136名。バラ郡はもとより隣のロータート郡、あるいは国境を越えてインドからも40℃もの炎天下を2、3時間もかけて歩いてくる。そして診療所前の日陰や廊下、集会室で途方に暮れたように順番を待っている。さほど広くない診察室では、CBRスタッフ、眼科助手が、溢れんばかりの患者をかいくぐりながら声を張り上げて、受付や記録などに忙しく立ち働いている。担当医のリジャー医師はというと、懐中電灯の光を患者の眼球に当てながら、あるいはスリットランプをのぞき、手際よく診察をこなしている。天井でカラカラ回る扇風機など物の役に立たず、医師も患者も汗だくである。

## 眼科診療

Bara Eye



月13日の間に延べ3,062人の患者を診察しました。貧しいこの地の人々にとって、今や無くてはならない存在になっています。

### 食生活と失明

「緑黄色野菜をなぜ食べないのか？」と聞くと、リジャー医師は「野菜はカトマンズで売るために作っているが、食べる習慣はほとんど無い。このため子どもたちは何らかの病気に罹患している」と悲しげに語っていました。

バラ郡の人々の食事は、基本的に1日2食です。食事内容はほとんど変わることが無く、米飯とジャガイモのカレー、それにダルという豆のスープです。摂取する栄養素の絶対量が不足しているため、身体の健全な育成が損なわれ、さまざまな栄養障害が起こります。中でもビタミンAの不足は深刻

これはナラヤニ県バラ郡カレーヤ町にあるバラCBRセンター眼科診療所の診察風景です。この診療所は1991年外務省のNGO補助金を受け、現地コミュニティと共同で建設しました。診療機具などは日本より運び込み、隣接する国境の町ビルガンジの県立病院と私立眼科病院から眼科医と助手を派遣してもらい1992年1月より無料のウィークリー・クリニックとしてオープンしました。

バラ郡は、ネパール南部インド国境に沿って広がる亜熱帯の典型的な農村地帯です。広さは東京区部の約2分の1、ここに41万人が住んでいます。この地は、衛生状態が悪く、白内障やビタミンA欠乏症、トラコーマなどによる失明が多いところとして知られています。わたしたちの個別訪問調査(バラ郡3分の2の地域、人口28万5千人)でも、視覚障害者312人、白内障患者4,329人、その他眼疾患患者11,916人が見いだされました。

バラ眼科診療所は1992年3月13日から1993年5



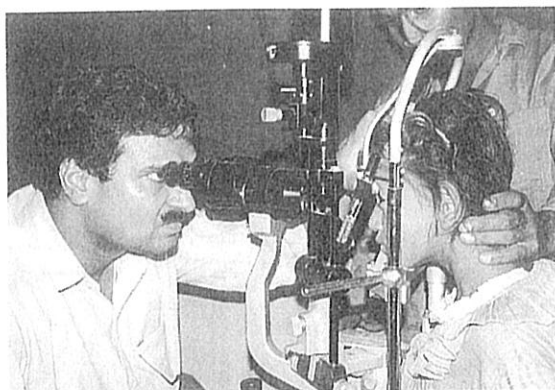
People waiting for eye examination



Patients overflowing the waiting room

# と失明予防

Care Project



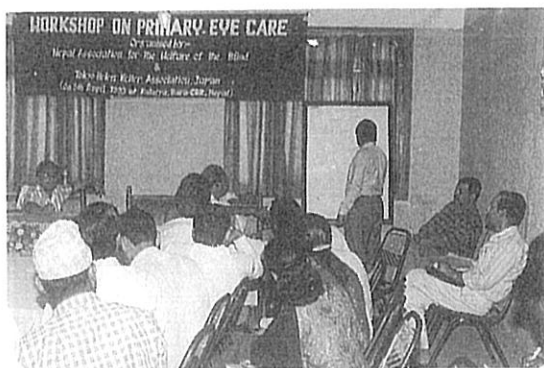
Doctor Rijal looking into a slit lamp microscope

です。角膜軟化症になり失明するばかりでなく、他の病気に感染しやすくなり、全身の抵抗力が低下し時には死に至ります。

## C B R と失明予防

わたしたちは、1989年より農村地域における視覚障害者の自立を目的にC B R (コミュニティ・ベース・リハビリテーション)を展開して来ました。さらに、地域の要望に応じて失明予防をもC B Rの一環として位置づけました。そして、眼科診療のほかに、栄養障害による失明を予防するために0～6歳の幼児を対象にビタミンAの配布を行っています。また、疾病にかからないようにするには、基礎的な衛生知識の普及と食生活の改善が最も重要であることからC B Rセンターに教師や地域のリーダーを集め栄養・衛生講習会を開催しています。さらにフィールド・ワーカーがビタミンAを配布するときに絵入りのポスターや緑黄色野菜を手にしなが、村の母親たちにビタミンAの必要性和食生活の改善を指導しています。

このような活動を通じて私達は「人々がいかにして自らの地域社会を改善していくのか？」そして、「私達はそのためにどのような手助けができるのか？」常に考え続けています。



The total number of patients examined today amounted to 136. Many of them are from Bara District and adjoining Ruthat District, but some of them are from India who crossed over the national boundary and walked for a few hours under the temperature of more than 40°C. Being completely exhausted, they wait for their turns in the shade in front of the clinic, hallways, and assembly rooms. Amidst of full of patients, CBR staffs and ophthalmic assistants are cluttered with medical records and receptions of patients. Dr. A. Rijal efficiently examines a patient's eyeball with flashlight and Slit Lamp Microscope. A fan under the ceiling is not working effectively, so both doctor and patients are dripping with sweat. This is a typical scene of the eye clinic of the Bara CBR Centre in Kalaiya, Narayani Zone. Funded by Japan Ministry of Foreign Affairs, Subsidy System Established for NGO Projects, we established this clinic in cooperation with the local community. Medical equipments were brought from Japan, and ophthalmologists and their assistants are sent from Zonal Hospital and Kediya Eye Hospital in an adjoining town called Birganji. The clinic opened in January, 1992. Since then the clinic offers eye examination and treatment twice a month. Last year (13 March 1992 - 13 May 1993), they treated the total number of 3,062 patients and became indispensable for the local community.





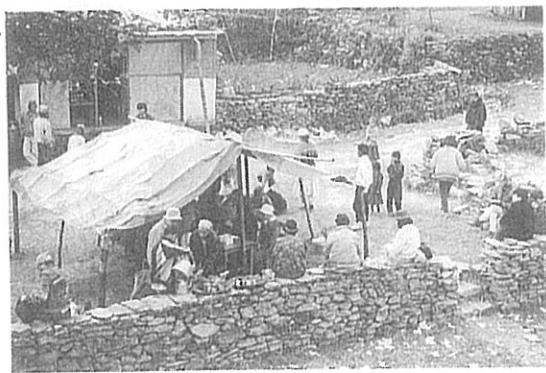
### 挨拶こそが触れ合いの原点

斎藤 績

去る平成4年12月25日より、10泊11日の日程で東京ヘレン・ケラー協会のお世話でネパールへ行く機会を作って頂き、さらに、このツアーに参加した者の譲り合い、助け合いによって楽しい旅の出来たことを団長としてこのツアーに係わった方々に対し、まずもってお礼を申し上げます。

以下、私がネパールにおいて最も強く感じたことの中から、誌面の都合により、一つだけをかいつまんで申し上げます。

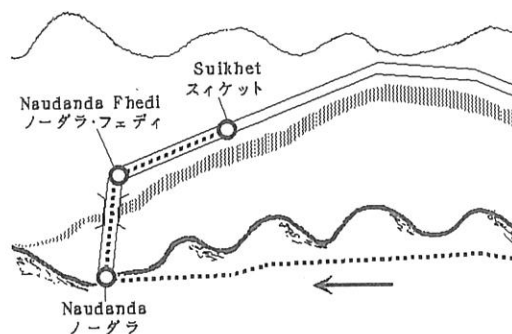
「温かい心、その心は挨拶から……」この言葉は私が、日に一度は口にするものです。私は、挨拶こそが触れ合いの原点である」と思っている。しかし、今の日本社会での触れ合いの様子はどうか？私は、毎朝同じ時間帯のバスに乗って通勤している。おそらく毎日乗り合わせる乗客は私の顔を見知っていると思われる。しかし、バス停で私の方から「おはようございます」と声をかけても大方の場合返事は返ってこない。その点ネパールでは、見ず知らずの者にさえ必ずきちんと挨拶を返す。棒切れを振り回して遊んでいた子供が、それを投げ捨て、手を合わせ「ナマステ」と挨拶を返してくれた。



Lunch at the top of the Sarangkot Hill

## 第3回スタディ・ツ

— ポカラからサランコットの丘を越え



..... トレッキング・ルート

Phewa  
ペワ

The trekking route: from Pokhara over the Sarangkot Hill, an overnight stop at Naudanda, to Sulkheta

「ネパールは貧しい国」、従ってそこに住む国民の大半も貧しい。しかし、心は誠に豊である。それにひきかえ、世界屈指の富める国といわれる我が国の国民の心はなんと貧しいことか？」と痛感させられ、人間にとって最も大切な心を『物』と取り替えてしまった『愚かさ』を諭されたこの度のネパール・トレッキング・ツアーであった。

### ネパール・スタディツアーに参加して

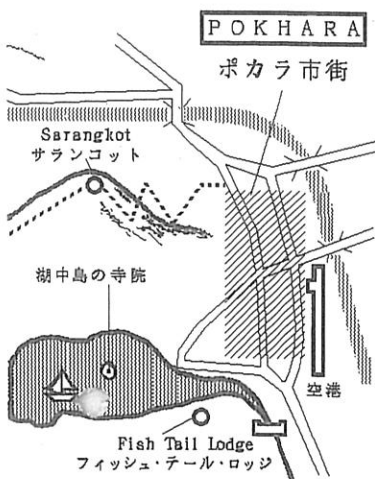
天野 治夫

今回のネパール旅行は、トレッキングというよりまさに「ネパール・スタディ」という名前にふさわしいものであった。現地では自分の体を通してネパールを感じることができたし、交流を通して人情に触れることもできた。総勢25人で成田を出発、バンコックに一泊してカトマンズに着いたのは12月26日である。空港を出ると、石畳の道路にはときおり牛や羊や鶏が歩き回っていた。ホテルの庭で、ネパール・ティをすすりながらトレッキングの説明を受ける。いかにもネパールの雰囲気の中で、三日間のテント暮らしに備えてゆっくりと眠る。

朝はかなり寒かったが、日中は気温も上がりそれに山歩きということで汗をふきふきの行程だ。30人余りの現地の人達が、私達のために実に良く

# アーの思いで

ノーダラ泊、スケットへー



ポカラでは、統合教育のアマルシン・ハイス쿨を訪問した。この国の教育は、原則として十年制で、大学まで進めるのはカーストでも頂点に属する一握りの人達だという。盲教育は、まだまだ始まったばかりのようだ。インドと中国という大国の利害に挟まれながら、必死に国造りに励む国ネパール。ビブさんも、チャムさんもロビンも、高校生のマニッシュも・・・みんな個性を持った実にいい人たちである。機会があれば、是非もう一度この国へ行きたいと思う。

## ネパールの石

S. H.

今、私の本棚にはトレッキング二日目にキャンプを張った河原から持ち帰った、直径10cm、厚さ5cmほどの丸い石が座っている。このずっしり重くピカピカ光る石がネパール旅行の証拠品である。

三泊四日のトレッキングの行程を経て、12月30日ポカラの町に入った。このポカラ周辺には中国のチベット進攻により逃げて来たチベットの難民キャンプが四つあるそうである。ペワ湖のほとりで、昼寝をしていた私は、そのキャンプから来たらしい少女に「ジュエリーを持って来ているから、見るだけ見るだけ！」と起こされてしまった。



働いてくれた。荷物の運搬、テントの設営、食事の準備はもちろんのこと、夜は寒さを気遣って湯たんぽまでくれた。

テントでの夕食は、雰囲気満点だ。ネパール・カレーはいかにも特徴的だ。ミルク・ティ（山羊の乳）は、実に美味しい。食後は薪を囲んでお酒を味わいながらの時間だ。ギターや太鼓に併せて歌や踊りが続く。現地の人達の踊りは実に上手い。つられて何人かの女性が輪の中で踊る。食事や環境の変化に女性は適応が早いようだ。湖でのボート遊び、チベタン・キャンプでの値段を交渉しながらの買い物、寺院の見学・・・どれもこれも実に印象的だ。どこへ行っても子供の数が多く、物売りが多い。

結局この子から小粒のトルコ石のネックレスと指輪、小さなラピスラズリー(瑠璃)のついたチョーカー(首飾りの一種)を買った。

あくる日、そのキャンプのひとつを訪ねた時に知ったことだが、チベット難民キャンプは、その周辺ではとても豊かなコミュニティであった。村の中は整っており、学校も完備し、その一角に観光客向けに店が何軒も品物を広げていた。絨毯から小物に至るまでの織物、仏像、玩具、民芸品、アンモナイトをはじめとする天然石と、その加工品であるアクセサリ。居留地にあっても独自の産業を興す人々のしたたかな生きざまが、ここには満ち溢れていた。

ネパールは最近まで、秘境と呼ばれていた。しかし、このポカラは今や世界的なリゾート地である。カトマンズやポカラから眺めると外国は以外に近く、貧しい農村は遥か遠くに感じられる。ネパールもパソコンと栄養失調が同居する、現代世界共通の矛盾を持った社会に塗り替えられつつあることを、私はひしと感じた。

カトマンズの市中では、いたるところに毛沢東の肖像を印刷した共産党のポスターが見受けられた。ここへはマルクス主義も、歩いて来たのだろうか？



### ✕ ツアー参加者リスト ✕

#### 《部屋割り順》

- 【1】斎藤 績(北海道、全盲) 【2】佐々木辰彦(北海道)
- 【3】佐々木 信(北海道、全盲) 【4】只野幸男(北海道)
- 【5】佐々木 玲子(北海道、全盲) 【6】鷹田嘉代(北海道)
- 【7】天野治夫(千葉県、弱視) 【8】天野洋子(千葉県)
- 【9】佐藤テル(秋田県、全盲) 【10】佐藤睦子(秋田県)
- 【11】高橋恵子(千葉県、全盲) 【12】荒田佐多子(東京都)
- 【13】山岸裕子(神奈川県、全盲) 【14】菅野公妙(神奈川県)
- 【15】諸岡スミ子(東京都、全盲) 【16】庄田佐枝子(東京都)
- 【17】佐藤治子(東京都、弱視) 【18】菅原温子(協会職員)
- 【19】井上聡(千葉県、全盲) 【20】福山博(協会職員)
- 【21】樋渡敏也(東京都、全盲) 【22】北條昇(協会職員)
- 【23】佐々木秀明(協会職員) 【24】竹田功(福島県、全盲)
- 【25】遠藤康弘(添乗員)

## 鯨アマルシン高校の歌声葬

ツアー一行が12月30日に訪れたアマルシン高校は、ネパールに四つある統合教育のモデル校のひとつ。ネパールには高名な盲人歌手がいることもあり、盲児も音楽が大好きである。早速、我々は即席合唱団の大歓迎を受けた。

参加者が日本から持参した点字器などをプレゼントしたり、教育制度についてのレクチャーを受け質疑応答をしていると、時間はみるみる過ぎて行った。そして別れもまた、歌で締めくくられた。彼らはこの日のために、何回も歌の練習をしたようで、もっと歌いたがったが、時は無情である。もっとも、この歌声もモデル校であるからこそ、聞くことができたのだが？

### 旅程表

|                    |                                                                    |
|--------------------|--------------------------------------------------------------------|
| 1992年<br>12月25日(金) | 成田10:30発(TG-641)<br>バンコック Rama Gardens Hotel泊                      |
| 26日(土)             | バンコック10:55発(TG-311)<br>カトマンズ NAWB 点字出版所見学、カトマンズ観光<br>Summit Hotel泊 |
| 27日(日)             | ゴルカ・トレッキング、ゴルカ山中にてキャンプ                                             |
| 28日(月)             | ゴルカ古城・バザール見学、Damauli川にてキャンプ                                        |
| 29日(火)             | ポカラ・トレッキング、サランコットの丘にて昼食<br>Naudandaにてキャンプ                          |
| 30日(水)             | Suikhetまでトレッキング、バスでアマルシン高校へ<br>盲人部を見学の後、交流会を開く、Fish Tail Lodge泊    |
| 31日(木)             | 空路カトマンズへ、バクタプール観光、<br>現地盲人との交流会                                    |
| 1993年<br>1月1日(金)   | 午前中バタン観光、カトマンズ13:55発(TG312)                                        |
| 2日(土)              | バンコック市内観光、The Menam Riverside Hotel泊                               |
| 3日(日)              | バンコック市内観光、バンコック22:35発(TG-642)                                      |
| 4日(月)              | 成田07:30着、解散                                                        |

We held the third Nepal Study Tour for the Blind, which extended to eleven days from December 25, last year. 25 people participated the tour, and 12 of them were blind. During the 4-day-long trekking, guides, sherpa, cooks, and a doctor joined us, so the group expanded to 50 people. Although we experienced some difficulties due to the different culture and environment, we fostered the international friendship through a trekking, a visit to NAWB Braille Printing House, and a tea party with blind students and teachers at Amar Shingh Secondary School in Pokhara.



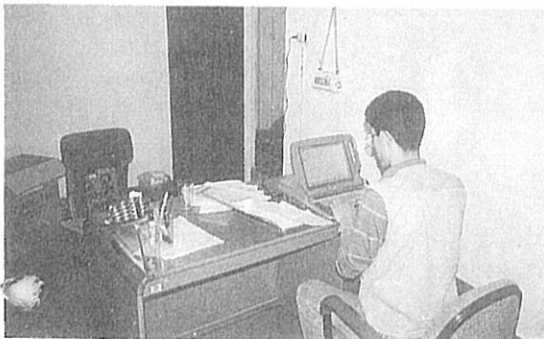


## 東京の研修生

昨年十月、技術指導と事業管理のためネパールを訪問した我々は、ひとりのネパール人を連れて帰国した。彼の名前はシュレス・シュレスタ。カトマンズ周辺に古くから住み着いていたネワール族の末裔である。我々は、彼の義兄が経営するペンションに宿泊していたので、その縁で知り合った。彼は日本語を勉強しており、失明者である当協会理事のガイド・ヘルパーを気持ち良く引き受けてくれたのである。

東京での彼は、当協会の近くにあるキリスト教系の国際学舎に寝泊まりし毎日歩いて研修に通って来た。カトマンズで想像していた日本と、実際の東京はかなり掛け離れていたようで、彼は来日直後から頭痛に苦しんだ。机を並べてのマンツーマンの指導も、想像以上に苦痛を与えたようだ。

我々はそれまでの『座学』一辺倒の研修を見直し、間に点字製版や印刷、録音製作などの現場研修を挟むことにした。このようにして、様々な職員と知り合いになる機会を作り、気心が知れるようになることで彼の生活も一変した。特にベルギー人のボランティアと意気投合したこともあり、嘘のように頭痛が消え、生来の朗らかな性格が見えるようになった。



A administrator at the Kathmandu Office

## 研修内容

4.5カ月間(1992.10/24 - 1993.3/7)のシュレス・シュレスタの研修は、下記のように多様なものであった。

- ①ブラザー英文ワード・プロセッサの操作
- ②シャープ日本語ワード・プロセッサの操作
- ③日本語点字の基礎
- ④ネパール語点字の基礎
- ⑤点字製版実習
- ⑥点字印刷および製本実習
- ⑦点字製版機の保守・点検
- ⑧施設見学(東京): 日本点字図書館
- ⑨録音図書製作実習
- ⑩点字教科書製作の業務報告書作成演習
- ⑪C B Rの業務報告書作成演習
- ⑫報告用写真の撮影実習
- ⑬施設見学(大阪): 点字毎日、日本ライトハウス
- ⑭国際会議参加: RANAP(Rihabilitation Action Network for Asia and Pacific)
- ⑮「国連・障害者の十年最終年国民会議」参加
- ⑯ネパール語文書の和訳
- ⑰カトマンズ事務所の運営と経理演習



## カトマンズ事務所オープン

1993年3月14日(日)、カトマンズにおいて当協会の定宿になっているペンション・サクラの一室を借りて連絡事務所を開設した。当日のカトマンズ市内は、共産党主導のゼネラル・ストライキが敢行されたため騒然としていた。このような中、我々は前日予約しておいた事務机とスチールロッカー、および日本大使館の協力を得て持参した日本語ワープロを設置し、連絡事務所を開設した。

なお、連絡員と事務所の住所は下記の通り:

Mr. Suresh Shrestha,  
Administrator,  
Kathmandu Liaison Office of THKA  
Room No. 303, Pension SAKURA  
P. O. Box 2554, Kathmandu, Nepal  
TEL / FAX: (977) 1-416499

## 大盛況のチャリティ・バザール

1992年6月24日～26日、池袋サンシャインシティコンベンションセンター「展示ホール」において「プロオーディオ総合機器展92」の一環として「チャリティ・バザール」が開催されました。

最新のプロ用オーディオ機器が一堂に並ぶ会場の一角には、各オーディオメーカーやレコーディングスタジオ、PA会社から提供されたプロ仕様のレコーダー、スピーカー、マイク、各種パーツなどが所狭しと並び、大盛況でした。中でも骨董品のような往年の名器が注目を集め、その前で懐かしそうに語らうOBの姿が印象的でした。

当協会はこのコーナーで、ネパールでの国際協力の写真展をおこなうとともに、運営にも協力し収益の一部1,210,980円が、協賛各社より寄付されました。この寄付金は、全額ネパールの視覚障害児の教育およびリハビリテーションのために使わせていただきました。ご協賛いただきました各社、および「プロオーディオ総合機器展92」実行委員会に対し厚く御礼申し上げます。



## ベルギーとネパールの友情

Elinch Filip & Suresh Shrestha

国際キリスト教青年交換(ICYE)から派遣されベルギーから来日したエリック・フィリップ君は、昨年の9月11日～今年の4月26日まで、当協会点字出版局にて週に三日間のペースでボランティア活動を行いました。ネパールからの研修生シュレス・シュレストタ君の研修と重なったため、二人は意気投合し友情を深めました。しかし、仲の良い二人でしたが、我々には好対照の印象を残しました。シュレス君は、先進国の物質文明に驚嘆すると共に、進んでその文化の吸収に励みました。一方、エリック君は、禅や武道、忍術などに興味を示し、物質文明へのアンチ・テーゼとして、東洋の伝統的な精神世界にあこがれを持っているようでした。彼は当協会での活動を通じ、障害者への理解も深めたようです。帰国して美術大学に復学してから、彼は障害者へのボランティア活動を続けたいと抱負を語っていました。



## 「国民会議」テーマ別集会で報告

1992年は「国連・障害者の十年」の最終年であるため「国民会議」が組織され芸術祭や全国キャンペーン、テーマ別集会などさまざまな催しが活発に開催されました。

テーマ別集会は12月7日に、「人権」「教育」「自立生活」など11のテーマで開催されました。当協会井口理事は「国際協力・交流」において、リハビリテーション分野で国際協力に従事している団体として、ネパールでの活動について報告しました。

本年から新たに「アジア・太平洋障害者の十年」が始まったため、関係機関・団体のネットワークや組織作りが今後も積極的に行われる計画です。

## ネパールのボランティア

Nami Hashimoto & Yoshiko Matsushashi

研修を控えたシュレス君は、昨年の7月15日～8月15日までカトマンズにおいてボランティアの橋本奈美さんから、連日日本語の特訓を受けました。

また、3月16日～5月15日まで松橋佳子さんは、ボランティアとしてカトマンズ連絡事務所にて連絡員の補佐役として活動されました。

ありがとう、ございました。



## 1992年度事業報告

## 1. 国家社会事業調整協議会(SSNCC)との協定延長

1989年3月に調印した当協会とSSNCCとの三年協定が昨年3月で満了となった。本協定は、ネパール王国ナラヤニ県バラ郡において視覚障害者のための更生援護事業、いわゆるCBR事業をネパール盲人福祉協会(NAWB)と共同で行うためのもので、本事業は、現地スタッフの努力によりネパールにおけるCBR事業のモデル・ケースとして称賛されるほど順調に進展した。このためNAWBは、せっかく豊かな成果が期待される事業を三年で終わるのは残念だとして、当協会に対して本事業の延長を強く要望してきた。

そこで我々は、同様にカトマンズで行っているNAWBとの共同事業である、点字教科書無償配付事業を中心とする視覚障害児教育の推進をも包括して1992年10月20日、協定を三年間延長することに同意し、ネパール政府の認可を受けて協定を締結した。

現地調査をする当協会職員的身分を保障するために、また援助物資に対する200(%)もの高額な関税を免れるために本協定の締結は必要不可欠である。ただし、1993年からは従来免除されていた輸入手数料1(%)が別途必要となった。

なお、SSNCCは政府の方針により協定締結直後に改組された社会福祉協議会(SWC)に名称を改めた。これに伴い当協会は、ネパールで活動する国際民間公益団体(INGO)として改めてSWCに登録を行った。

## 2. 視覚障害者リハビリテーション(CBR)事業

郵政省国際ボランティア貯金の配分金を受け、昨年度の調査によって新たに発見された215名を含む312名の視覚障害者に対して、社会復帰のための更生相談、歩行訓練、日常生活技能訓練、および職業訓練を行った。また、自活補助金を受けて、家畜の飼育や雑貨店経営などにより生産活動を始めた者に対しては、適宜職業指導を継続して行った。

この他、昨年度より開始した6歳未満の児童を対象にした、失明防止のためのビタミンA剤配布も継続して行った。また、主に教員を対象とした眼科医による「失明防止講習会」も開催し盛況であった。

1991年1月よりCBRセンター付属眼科診療所で行っている眼科検診と診療も、定期的に行うことができるようになり、1992年3月～1993年3月までの間に合計29回実施し、この間の受診者は2,660名にのぼった。

本年1月より新たに開始した寄宿制統合教育校で、8名の盲児を就学させることができた。これにより、バラ郡の統合教育校は5校となり、就学盲児は17名となった。

従来の統合教育方式では、ある程度生活に余裕のある家庭の子弟でなければ就学が難しかった。しかし、寄宿制統合教育によりこの垣根が取り払われたため、現地では画期的な教育方法として注目された。

## 3. 点字出版事業

郵政省国際ボランティア貯金の配分金を得て、1991年6月に着工したNAWB点字出版所の完成を祝い1992年10月に落成式を行った。

この新築された点字出版所では、引き続きネパール全土の小学校(1～5学年)用、中学校(6～7学年)用点字教科書を製作し、無償で配布している。また、本年度からは高校(8～10学年)用教科書の製作も開始し、すでに配布も始めている。幾何学や地理などの高校用教科書では、図版による説明が不可欠である。このため、我々は急遽点字出版所・簡易点字図版作成機の製作を依頼し、現地において技術指導を行った。また、今年度より小学校1年生用の教科

書として、「私のネパール語」、「私の算数」、「私のまわり(社会)」が加わったため、新学期(地域によって異なる：バラ郡では1月)に合わせて製作し、配布した。

## 4. スタディ・ツアーの実施

我が国とネパールの視覚障害者の交流を目的とし、あわせて当協会がネパールで行っている事業の理解を深めるため、ネパール・スタディ・ツアーを1992年12月25日～1993年1月4日の日程で行った。

参加者は、添乗員と付き添いを含めて25名で、カトマンズにおいてNAWB点字出版所を見学すると共に、盲人職員との交流会を開いた。また、ネパールの景勝地ボカラではトレッキングを行うとともに、統合教育のモデル校のひとつであるアマルシン高校において盲学生および教師との交流を深めた。

## 5. カトマンズ連絡事務所開設

NAWBと当協会の相互理解と綿密な連絡調整を行い、事業の円滑化をはかるため、3月14日にカトマンズ市の「ペンション・サクラ」303号室に連絡事務所を開設した。連絡員はネパールの青年シュレス・シュレスタ氏で、開設にあわせて現地で採用した。なお、ペンション・サクラは、日本の援護団体の定宿になっている民宿で、ここにアジア眼科医療協力会(AOCA)の事務所もある。

## 6. ネパール連絡員の事前研修

カトマンズ連絡事務所開設のために、1992年10月26日～1993年3月6日までシュレス・シュレスタ氏を当協会に招聘し、海外援護の事業管理をはじめとして、点字製版・印刷、録音製作などの研修を実施した。本研修は、連絡員としての資質を見極めると共に、現地における業務を遅滞なく進めるための事前研修で、氏は日本語の習得も早く、当初我々が予想した以上の成果を上げることができた。

## 7. 広報・募金活動

6月24日～26日まで池袋サンシャイン・シティで開催された《プロ・オーディオ総合機器展'92》においてチャリティ・バザーを開催した。

9月3日「愛の光通信」第7号を発行して広報・募金活動を行った。

## 8. 受章・表彰

井口淳理事が、ネパールでの国際貢献の実績により黄綬褒章を受章した。また、当事務局は7月13日に十年間の海外援護の実績が評価され外務大臣より表彰された。

## 9. その他

12月7日「国連・障害者の十年」最終年記念国民会議において井口理事がネパールにおける当協会の援護活動について報告を行った。

当協会の活動は下記のような雑誌等の媒体により各方面に紹介された。

「くらしの木」1992年9月号

「図書館教育ニュース」1993年2月7日発行

「友情」1992年11月号

「国際協力」1992年9月号



## 1992年度会計報告

自 平成4年4月1日  
至 平成5年3月31日

| 収 入 の 部   |            |            | 支 出 の 部     |            |     |
|-----------|------------|------------|-------------|------------|-----|
| 科 目       | 金 額        | 摘 要        | 科 目         | 金 額        | 摘 要 |
| 助 成 金 収 入 | 10,830,000 | 国際ボランティア貯金 | 事 務 費       | 2,422,512  |     |
| 協 賛 金 収 入 | 841,500    | 毎日写真ニュース   | 賃 金         | 890,000    |     |
| 募 金 収 入   | 3,387,980  | 内山武志 他     | 交 通 費       | 16,790     |     |
| 販 売 収 入   | 159,900    | テレホン・カード   | 印 刷 製 本 費   | 326,184    |     |
| 雑 収 入     | 46,406     |            | 役 務 費       | 352,072    |     |
|           |            |            | 借 料 損 料 費   | 266,232    |     |
|           |            |            | 雑 費         | 571,234    |     |
|           |            |            | 事 業 費       | 14,790,523 |     |
|           |            |            | 海 外 援 護 費   | 10,689,570 |     |
|           |            |            | 海 外 出 張 費   | 3,407,053  |     |
|           |            |            | 事 業 費 管 理 費 | 230,772    |     |
|           |            |            | 通 信 費 雑 費   | 456,348    |     |
|           |            |            | 交 通 費       | 6,780      |     |
| 前年度より繰越   | 9,002,712  |            | 次年度へ繰越      | 7,055,463  |     |
| 合 計       | 24,268,498 |            | 合 計         | 24,268,498 |     |

協賛者ご芳名 (五十音順・敬称略) 自 1992年4月1日  
至 1993年1月31日

|            |               |                 |               |                |           |
|------------|---------------|-----------------|---------------|----------------|-----------|
| 赤城村        | 浅草信用金庫        | アサヒビール          | 味の素           | アスモ            | 我孫子市      |
| 有賀 信男      | 井坂 啓          | 伊豆箱根鉄道          | 市川ガス          | 一宮町            | 伊東パークゴルフ場 |
| 伊藤製作所      | 茨城ヤナセ         | 茨城食料            | 上野運輸商会        | 宇路建設           | 江差信用金庫    |
| 王子製紙       | 大井製作所         | 大川設計            | 大橋サービス        | オカハシ           | 忍野村社協     |
| 小田急労組      | オーク           | 海外経済協力基金        | 柏南病院          | カルピス労組         | 河西工業      |
| 関東開発       | 木更津中央高校       | 鬼怒川ゴム           | 共同乳業          | 教育同人社          | 岐阜経済大学    |
| 九段会館       | 京急開発          | 月桂冠             | 小岩井乳業         | 甲西町            | 光洋企業      |
| コヤマドライブスカー | コンフェッショナル・コトナ | サウンドクラフト        | 相模ハム          | 桜田病院           | サッポロビール   |
| サニカントリークラブ | 三協精機製作所       | 三市収益            | 参天製薬          | サンド薬品          | 志賀町       |
| 資生堂        | シチズン          | 下田建設業協会         | 下総町社協         | 社会調査研究所        | 昭和アステック   |
| 白沢電気       | 信栄製作所         | 新日本食品           | 自治労神奈川県       | 潤徳女子高          | 住友スリーエム   |
| 駿台学園高校     | 聖徳学園          | セキショウ           | セレマ           | 草月会            | 太知商事      |
| 大鵬宝薬品工業    | 高根沢町          | 滝根町             | 田中病院          | 第一企画           | 第一電子工業    |
| ダイセル化学     | 中外製薬          | 中京大学            | 千代田総合法律事務所    | 鶴川高校           | 鶴美屋       |
| T & K      | DCカード         | 電気化学工業          | 電事連           | 東海堂            | 東京田辺製薬    |
| 東芝労組       | 東武建設          | 東北電力            | 特別区競馬組合       | トット基金          | 富里町       |
| 豊栄市社協      | 同潤会病院         | 中鉢酢店            | 那須ゴルフカントリークラブ | ニコソ            | 日栄学園      |
| ニチレイ       | 日興証券          | 日産サニー千葉         | ニッセイ・エヌ・ビー    | ニッセー           | 日本証券      |
| 日本ケミコン労組   | 日本歯科政治連盟      | 日本マナー・システムアカデミー | 日本学園          | 野津漬物           | 野村証券      |
| 波崎町社協      | 花巻市           | 萬有製薬            | パイオニア労組       | 日野車体           | ひめゆり総業    |
| 平岡ボデー      | ファインザー製薬      | ファミリーマート        | 深沢 信夫         | 藤井脳神経外科        | 富士ゼロックス   |
| 富士通労組川崎支部  | 船引町           | 文化女子大学          | 文化シャッター       | 北陸NEC          | ホリ企画      |
| 松戸市        | 松菱            | マルウタシロ          | マルシメ          | マルシンフーズ        | 丸美屋食品     |
| 三原田組       | 美浦村           | 宮地組             | 武蔵野女子大学       | 森永エンゼルカントリークラブ | 森山工業      |
| 八千代銀行      | 柳津町           | 山口菓子舗           | 山梨建設業協会       | ユカ             | ユニマツト     |
| 横浜女子商業高校   | 横山光輝          | 吉川組             | 吉プロ           | よつ葉乳業          | レリアン      |
| ロッテ労組      | 渡辺建設          |                 |               |                |           |

## 寄付者ご芳名 (五十音順・敬称略)

自 1992年4月 1日  
至 1993年3月31日

|             |             |              |            |            |
|-------------|-------------|--------------|------------|------------|
| 青木 貞子       | 折戸 正明       | 高木 正三郎       | 浜野 彰親      | 村山 敏行      |
| 青木 正子       | 賀川 友吉       | 高橋 輝雄        | 林 鳳紘声      | 村山 知子      |
| 秋元 武雄       | 加来 典子       | 高橋 竹山        | 林 大        | 百瀬 皓       |
| 秋山 俱子       | 片桐 武昭       | 高橋 昇造        | 端山 智弘      | 森 雄士       |
| 秋山 恭子       | 勝又 誠子       | 高松キワニスクラブ    | 原田 美男      | 森 典子       |
| 阿佐 博        | 加藤 芳郎       | 竹村 実         | 春尾 知代子     | 柳家 小三治     |
| 浅田 きよか      | 加藤 晃        | 田代 岳         | 馬場 のぼる     | やなせ たかし    |
| 荒田 佐多子      | 金杉 克之       | 田中 雅治        | PL教団文京教会   | 藪内 清       |
| イクバル・ハニフ・明子 | 金森 なお       | 田中 茂         | ヒビノ(株)     | 山内 潤子      |
| 井口 文秀       | 金田 正一       | 玉谷 都千恵       | 檜山 美代子     | 山口 節子      |
| 井口 淳        | 金田 一郎       | 田村 和凡        | 檜山 寿子      | 山口 和子      |
| 石川 昌宏       | 鐘紡若里自由学院    | 辻 三郎         | 平田 貴美雄     | 山田 あき子     |
| 石川 尚代       | 上之郷 利昭      | 辻井 喬         | 樋渡 敏也      | ヤマトインダストリー |
| 石川 芳秀       | 神谷 辰夫       | 土本 光子        | (株)ファーストエ  | 総務部        |
| 石田 勝次       | 川崎 力        | ティアック(株)     | ンジニアリング    | 湯浅 寛       |
| 石原 幸栄       | 学習院女子短期大学   | 寺島 アキ子       | 福島県視力障害    | 吉田 重子      |
| 石光 貞子       | 和祭実行委員会     | 照井 博         | 者協力会       | 米田 昌徳      |
| 市角 誠        | 共同録音(株)     | 東京国際文具フェア    | 福原 ササノ     | ラインゴールド    |
| 市原 政春       | 吉良 洋子       | 実行委員会        | 富士総合研究所    | 若狭 裕二      |
| 出田 敦子       | 岐阜盲学校高等部生徒会 | 当山 啓         | 勉強会有志      | 若林 豊秀      |
| 出光 永        | 倉田 由次       | 東和インター       | 藤井 初子      | 若林 弘子      |
| 伊藤 定善       | 鞍谷 清孝       | ナショナル(株)     | 藤井 清光      | 早稲田医療専門学校  |
| 伊藤 啓子       | 河野 憲利       | 鳥羽田 節        | 藤井 誠司      | 渡辺 直明      |
| 井村 恵津子      | 肥塚 美和子      | 外山 雄三        | 藤江 幾太郎     |            |
| 入江 一恵       | 肥塚 隆        | 中神 誠         | 藤岡 正枝      | 《物品寄付者》    |
| 上野 伊津子      | 小森 愛子       | 中川 みどり       | 藤本 和美      | 岡野 マスミ     |
| 半若 寛治       | 近藤 文郷       | 中村 信子        | ポーズ(株)     | 土屋 浩美      |
| 内山 武志       | 後藤 良一       | 中村 歌子        | 本間 昭雄      | 西崎 澤子      |
| エアメールサービス   | 三枝 礼子       | 中山 弘子        | 政本 豊       | 塚原 伸郎      |
| (株)エンドレスエコー | (株)サウンドクラフト | 永井 悦子        | 榊 幸雄       | 長棟 正枝      |
| 大芦 明        | 酒井 久江       | 長倉 恵美(飯田)    | 松尾 宏之      |            |
| 大内 三良       | 佐藤 利村       | 百貨店(株)マックフォー | オーデオジャパン   |            |
| 大河原 正子      | 三遊亭 小遊三     | 長島 好夫        | 松下 信雄      |            |
| 太田 義秋       | 三遊亭 京楽      | 長屋 久美子       | 丸山雄一郎      |            |
| 大谷 宗太       | 塩月 弥栄子      | 名倉 秀幸        | 三浦 綾子      |            |
| 大本 貞堅       | 品田 雄吉       | 新阜 義弘        | 水野 まち子     |            |
| 岡野 マスミ      | 芝田 熊雄       | 西澤 憲一郎       | 三原 富美子     |            |
| 尾形 仂        | 昭和橋キリスト教会   | 野口 三男        | 御正 牧子      |            |
| 小川 元        | 白井 雅人       | 野田 寛         | 三宅 正太郎     |            |
| 小川 喜道       | 菅原 ふく子      | 橋本 時代        | 宮崎 勇       |            |
| 小河 静        | 杉山 嘉信(弘誓社)  | 橋本 宗明        | 宮澤 辰雄      |            |
| 尾関 育三       | 鈴木 又五郎      | 八田 公雄        | 宮原 満洲男     |            |
| オタリテック(株)   | 関口 雄子       | バップ(株)       | 宮原 俊恵      |            |
| 小田 淳        | 曾野 綾子       | 花岡無線(株)      |            |            |
| 小野 日央       | 高垣商店        | 壇谷 雄高        | 武蔵野女子学院生徒会 |            |



THKA receiving the "Commendation by the Minister of Foreign Affairs"



A Toyota Land Cruiser brought to the Bara CBR Centre

## 東京ヘレン・ケラー協会

### 創立40周年記念

オリジナルテレホンカード

頒価2,000円(2枚セット)



ヘレン・ケラー女史のポートレートと、ヒマラヤを背景に日本の盲人がトレッキングを楽しんでいる様子をデザインした、オリジナルテレホンカード2枚組。とりわけ女史の自筆サイン入りの写真は貴重です。本テレホンカードの純益は、すべてネパールの盲人援護に使われます。

### 募金をお願い

ネパールにおける失明防止と視覚障害者援護をさらに充実するために、募金をお願い致します。寄付金のご送金は、下記口座をご利用下さい。

郵便振替：東京5-91688

銀行口座：さくら銀行新宿支店(普)5101190  
シティバンク吉祥寺支店(当)0900095

### 寄付金に対する減免税措置

東京ヘレン・ケラー協会は、所得税法施行令第215条第4項および、法人税法施行令第77条第4項にかける社会福祉法人でありますので、所得税法第78条第2項第3号および、法人税法第37条第3項の規定が適用され、当協会に対する寄付金は次の通り、寄付金控除または損金算入について税法上の特典が受けられます。

1. 個人の方が寄付をする場合は、  
寄付金控除額 = (寄付金額と年間所得の25%のどちらか低い方) - 1万円
2. 法人が寄付をする場合は、  
一般寄付の場合の損金算入限度額の2倍まで、損金算入枠が拡大されます。

### 編集後記

ご存じのように、当事務局は1981年の「国際障害者年」を契機に開設され、「国連・障害者の十年」と共に歩んできました。そして今年「アジア・太平洋障害者の十年」がまたスタートします。

ネパールにおける我々の事業も、現地の度重なる強い要請にこたえ三年間延長することになりました。バラCBR事業は地域コミュニティの声と活力を吸収し、失明防止や視覚障害児教育にも積極的に取り組み、地域住民に大変喜ばれています。また、このような事業を主体的に管理するため現地連絡事務所も新設しました。二年ぶりに実施した視覚障害者を対象としたスタディ・ツアーも大好評で、異文化に接しての興奮が今も残る思い出深い旅でした。

ネパールの新聞を広げると、日本に関する記事が隣接する大国インドに次いで多く掲載されています。NGOの地道な事業にも関心が高く、期待も大きいようです。

皆様のより一層のご支援、ご協力をお願い致します。



**TOKYO HELEN KELLER  
ASSOCIATION**

Established 1950

14-4, Ohkubo 3-chome, Shinjuku-ku, Tokyo 169, Japan

発行：社会福祉法人 東京ヘレン・ケラー協会  
海外盲人援護事業事務局

住所：〒169 東京都新宿区大久保3-14-4  
TEL: 03-3200-1310 FAX: 03-3200-2582